休題閑話　創刊号　２００６．０７．２０．　　熊本大学教職員組合

鈴木委員長より、新企画と文章が届きました。組合の主張や思いを少しフランクな表現で発信しようという主旨と受け止め、新印刷物として発行することにしました。ただし、「委員長通信」的位置づけは避け、執行委員や書記局員あるいは一般組合員からの投稿も掲載する形にしたいと思います。

紙名は、「休題閑話」。もちろん「閑話休題」の倒置です。とりあえず、創刊号は委員長から届いた文章をそのまま掲載します。

組長の「あさってのこころだ！」

先日、久しぶりに小沢昭一を見た。ご本人には失礼なのだが、「これが見納めかな」という思いもあって、時間を割いて見に行った。77歳。ピアノを傍らに配した舞台の中央にマイクが一本。白のスーツ姿の小沢昭一のぽつねんとした「歌謡トークショー」といった風情だった。さすがに観客を飽きさせないあっという間の90分。

別に小沢のファンというわけではない。何本か芝居を見たことがあるが、記憶は漠然としている。「強いばかりが男じゃないといつか教えてくれたひと」というのが唯一思い出せる演目。芝居の内容はなにも思い出せないが、観劇後、やたらカツどんが食べたくなる芝居だったような（？）気がする。

そんなこんなの小沢昭一の舞台。昭和初期の流行歌、童謡にはじまり、蒲田での子ども時代の思い出、長崎の海軍兵学校での敗戦、死臭漂う広島、名古屋での「斬り込み隊」脱走、一面焼け野原の東京。そして全財産はたいてやっと手に入れたハーモニカのはなし。小沢の体験を谷川俊太郎が作詞した「ハーモニカブルース」をじっくり聞かせた。だが暗くない、むしろずっと笑っていたような気がする。しかし、ゲラゲラ、コロコロの笑いを通して、「戦争だけは金輪際まっぴらごめんだ！」のメッセージが確実に伝えられていた。感心し、感服し、そんな技量をうらやましく思った。

※

翌日、「学長挨拶」に出た。ふつう、入学式などで学長挨拶といえば、「学長が挨拶する」のだが、この時期の組合の用例では、「学長に挨拶する」ことを言う。業界用語は難しい。ともかく、久しぶりに﨑元先生にお会いし、組合に対しても率直な感想を伺うこともできた。とりわけ、労使関係の現状に関して、「けして良好な関係とは言い難い」という認識はまったく同感。もちろん、その要因については労使双方に主張はあろうが、「互いに疑心暗鬼になり、話し合いに入る前に身構えてしまう」状態は、大学の将来にとっても好ましいものではない。なんとかしたいな、と正直思った。

と思ったが、すこし時間がかかるだろうな、との思いもよぎった。個人の関係ならともかく組織と組織の関係だから一朝にしてというのも難しかろうな、と。コロコロと談笑しながら互いにメッセージを伝えあえたらどんなにいいことか、とつくづく思う。小沢昭一はやっぱりエライ！

※

そこで（どこで？）、組合活動「ズブ・シロウト」（「赤煉瓦」no.1参照）の今期委員長であるぼくは、個人として感じたこと、考えたことを自分の言葉で発信していこうと、なんの脈絡もなく、なぜか考えた。どんな意味があるのか自分でもよくわからないが、ともかくその第一弾がこれ。ライバル紙は「やまくら～ズ」（青年部機関紙）といったところか。

鈴木組長近似影

さて、件（くだん）の小沢昭一の舞台。「ハーモニカブルース」でしみじみと幕が降りないところが小沢の小沢たるゆえん。突如ミラーボールが降りてきて、ラジオ番組「小沢昭一的こころ」のテーマソング「あしたのこころだ！」を軽やかに歌い上げ、エンディング。この能天気さがとてもいい。これにあやかって、このレターの副題を「あさってのこころだ！」にした次第。要は次がでるかも分からない、ということ。ちなみに、「組長」は労働組合委員長の略。「乞うご期待」と言いたいところだが、この企画、はたして書記局のお許しをいただけるかどうか。　まあ、それも含めて、あさってのこころだ！